

## 二宮町立一色小学校

研究テーマ：9年間を見通した共通性と一貫性のある指導・支援を通した、  
「学びに向かう力」の醸成と資質・能力を育む指導のあり方(4年次)

### 1 実践の目的

二宮町では、令和5年4月より町内すべての学校が1つの施設分離型小中一貫教育校『にのみや学園』となった。学園の開校に向けて、にのみや学園の教職員全員の願いや想いを紡ぎ、教育目標を次の通り定めた。

『認め合い 高め合う 二宮の子』

この教育目標を実現するために、子ども同士の学び合いや話し合いを中心とした授業づくりに学園全体で共通性と一貫性をもって取り組んでいる。学級づくりの基盤や学習の進め方を揃えることで、子どもたちが安心して学んだり、進級したりできるようにするとともに、9年間を見通して子どもたちに必要な資質・能力の育成を図ることができると考える。

子どもたちに育みたい資質・能力を学園内で共通理解を図り、授業づくりを進めることを大事にしている。

二宮町で育みたい汎用的な資質・能力		
知識及び技能	思考力 判断力 表現力	学びに向かう力 人間性
①主体的に継続して勉強する	①必要な情報を集めて分析する	①多様な価値感の仲間を増やす
②多様な学びで知識を吸収する	②状況に応じて適切に判断する	②互いの違いを認めて高め合う
③知識を応用して上手に使う	③論理的で柔軟に思考する	③諦めずに自分の夢をかなえる
	④自分の考えを正しく伝える	

授業づくりでは、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」を意識し、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力・人間性を一体的に育てて

いくための授業改善を図ることを意識している。

特に、4年次となる令和6年度においては、学びに向かう力を高めていくために、以下の内容も研究の視点に加えて取り組んだ。

- ・習得の授業における子どもの主体性
- ・日常生活や学校生活との関連付け
- ・学習活動や単元全体の目的意識の共有

### 2 実践の内容

#### (1) 研究体制

今年度も引き続き、教育力向上アドバイザー吉新一之氏（元川崎市立川崎小学校長）を講師に迎え、指導・助言を仰いでいる。今年度も、クラスを限定せず、全学年で授業をして参観し合う形にした。

また、学級の受容的な雰囲気づくりの醸成を目指し、教員の人権感覚を磨き、多様な児童の理解を深めるため、星山麻木氏（明星大学教育学部教育学科教授）を招聘し研修会を行った。

#### (2) 研究授業、研究協議の様子

1年生国語では、日頃から取り入れている全員挙手、ハンドサインなどを通して、伝え合う楽しさの基盤を作ることができた。

2年生音楽「鑑賞、歌唱や器楽」では、自分や集団の演奏について伝え合うことで、客観的に評価し、目標に向けて表現しようとする態度につながった。目標などを意識して演奏する効果があった。

3年生保健体育では、「健康」について今の自分たちができることについて、全体で伝え合う時間と、「旅に出る」と名付けて、自由に席を移動して友だちの意見を見合う時間を取り入れて伝え合い学び合った。

4年生社会では、課題に対して、自分たちで資料からわかったことを話し合い、考えを広めたり深めたりした。自分たちで気付いたことから考えを見出してまとめをした。

5年生は、国語と総合の教科横断的な内容に取り組んだことで、児童の「やりたい」という意欲の高まりにつながった。小グループでの伝え合いを通して、全員が主体的に対話的に学び合うことができた。

6年生社会では、教員は授業のはじめに、児童と課題を確認するだけで、資料をもとに、子どもたち同士で伝え合い、板書して、まとめまで進めることができた。

特別支援学級では、少人数や集団の中で、児童なりの話し合いの参加ができるようになってきた。

### 3 実践の成果

どの学年・教科においても、学校全体で発達段階と児童理解を共有して取り組むことで、教員、児童共に、楽しく学び合い深め合うことができること等を確認できた。

#### (1) 子どもの変容

- 研究後も、学校生活の中で、子どもたちどうして、主体的に、伝え合い、板書したり、まとめたりするようになってきた。
- 他学年交流の場面で、率先して感想を伝え合って楽しむ姿が多く見られるようになった。例えば、4年生と6年生がお互いの社会を参観し、互いに良かったことを見つける、また、6年生が作った紙芝居を見て、1年生が6年生に感想を伝える等、異学年で交流して、学びを広めたり深め合

ったりすることにもつながった。

#### (2) 教員の変容

- にのみや学園5校で、お互いに参観して全体会に参加することで、教員同士の主体的に対話的な深い学び合いにつながり、楽しんで授業力を高めることができた。
- にのみや学園小中学校で取り組むことで、教員間で、幼保小中の発達段階を共有することができた。
- 学習の定着という面において授業づくりのヒントを見出すことができた。
- 児童が自由に発言できることで、子どもの実態がわかり、個別最適な学びや人間関係づくりにつなげることができた。
- 一斉の中で、個別最適な学びや誰一人取り残されない授業をすることで、改善する部分が見えてきて、習得の授業の見直しにもつながった。

### 4 今後の展開

今年度も「授業者がやりたい教科と単元」に挑戦し、吉新先生にご意見をいただく研究のやり方を取り入れたことで、子どもの実態をもとに、教員たちの「やってみよう。やりたい。」という思いにつながる研究になった。

また、学年でやってきたことや、めざすところを年度はじめに確認し、「今の児童の実態」に応じて目標や授業の進め方を柔軟に変更したことで、子どもたちの話し合いの経験が積み重ねられ、話し合いスキルがより大きく伸びることにつながった。

一方で、今年度から、にのみや学園の研究に参加した教員にとっては、はじめは戸惑いがあった。次年度の研究においても、1学期当初の教員間の共通認識を図っていく。